

ズビグニェフ・スコヴロン教授を迎えて  
ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演&演奏会

# ポーランド楽派を聴く ～ショパンとルトスワフスキ～

2013 年

10 月 15 日 (火)

19:00 開演  
(18:30 開場)

札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール  
(札幌市東区北 16 条東 9 丁目)



## 第 I 部

---

### 《対談》

#### 『ショパン全書簡 1816～1831 年』をめぐって

ズビグニェフ・スコヴロン（ワルシャワ大学）

三浦 洋（北海道情報大学） —通訳つき—

---

### 《演奏》F. ショパン

- ◆ 悲しみの川 作品 74-3、いとしい人 作品 74-12

松井亜樹（ソプラノ）、高橋健一郎（ピアノ）

- ◆ バラード第 3 番 変イ長調 作品 47

坂田朋優（ピアノ）

## 第 II 部

---

### 《講演》

#### ヴィトルト・ルトスワフスキの音楽における芸術性

ズビグニェフ・スコヴロン —通訳つき—

---

### 《演奏》W. ルトスワフスキ

- ◆ 遅れてきたウグイス、トララリンスキ氏について

松井亜樹（ソプラノ）、高橋健一郎（ピアノ）

- ◆ ピアノのための民謡風メロディー より

「ああ、私のヤン」「羊飼いの少女」ほか

川染雅嗣（ピアノ）

- ◆ 舞踏前奏曲

菊地秀夫（クラリネット）、谷本駿子（ピアノ）

## ご挨拶

---

本日はお忙しいなか、「ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演&演奏会」《ポーランド楽派を聴く～ショパンとルトスワフスキ～》にお越しいただき、まことにありがとうございます。

今年は、現代音楽の巨匠として二十世紀後半の音楽界に大きな影響を与えた、ポーランドばかりでなく、現代ヨーロッパを代表する作曲家である W.ルトスワフスキの生誕 100 周年にあたり、記念コンサートなどが世界各地で催されています。

札幌でも、ワルシャワ大学のズビグニェフ・スコヴロン教授をお迎えし、北海道ポーランド文化協会会員有志を中心とした演奏者が協力して、記念の講演と演奏の集いを催すことになりました。

スコヴロン教授はルトスワフスキをはじめとする現代音楽についての専門家であるだけでなく、新しいショパン書簡集の編集にも携わっておられますので、今宵はショパンとルトスワフスキについての講演と演奏という贅沢な企画となりました。限られた時間ですが、お楽しみいただければ幸いです。

なお、この催しの実現にあたりまして、スコヴロン教授の招聘にご支援をいただきましたポーランド広報文化センター、会場をご提供いただきました札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部をはじめ、ご後援をいただきました諸団体、関係のみなさまから多大なご助力を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

2013年10月15日

「ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演&演奏会」実行委員会  
委員長 三浦 洋



# 講演要旨

## ヴィトルト・ルトスワフスキの音楽における芸術性 スビグニェフ・スコヴロン

ヴィトルト・ルトスワフスキは、ショパン、シマノフスキに続くポーランド最大の作曲家であり、調性音楽という19世紀の音楽の伝統を受け継ぎつつ再解釈し、新しい独自の音楽言語を探索した。

ジョン・ケージなど20世紀の新しい音楽の流れを取り入れながらも、ひとつの流派に偏ることなく、20世紀のさまざまな音楽スタイルのイデオロムを取り入れ、独創的な音楽を創造しようとした。

彼はリムスキー＝コルサコフの弟子ヴィトルト・マリシェフスキに作曲を師事し、師を通してフランス象徴派の音楽(ドビュッシーら)に親しんだ。また新古典派、特にアルベール・ルーセルの作品に熱中し、その結果生まれたのが「交響曲第1番」(1941-47)である。この作品はまだ伝統的な構成に基づいている。

戦後、ポーランドでは作曲家にも社会主義リアリズムの原理が押しつけられ、彼も子供や若者向けの役に立つ音楽の創作を行う。この時期の傑作のひとつが「管弦楽のための協奏曲」(1950-54)である。当時作曲家に課された「民衆音楽」の流れに与するものであるが、同時にここでは「二分割形式」に代表されるルトスワフスキ独自のスタイルがすでに確立されている。

1956年にハンガリーで起きた反社会主義運動の影響でポーランドでも芸術政策の方向転換が行われ、比較的自由に創作活動ができるようになり、ペンデレツキ、グレツキなど革新的スタイルをもった新しい世代の作曲家が現れた。ルトスワフスキ自身もこの時代に作風を大きく変え、「偶然性の音楽」の概念を作品に導入した。しかしダルムシュタットで始まった「偶然性の音楽」(ジョン・ケージら)とは異なり、彼は偶然性の介入をリズムの領域だけに限定し、音の高さは厳密に管理する「管理された偶然性」というスタイルを作り上げる。その時代の代表作が「ヴェネツィアの遊び」(1960-61)である。

作品における偶然性を管理することにより、彼は西側の作曲家たちにみられた「極端さ」を免れた。「ヴェネツィアの遊び」に続く「交響曲第2番」(1965-67)も含め、この時期の作品には「アド・リブ」(自由な即興演奏)の利用が特徴的である。

さらに、彼の作曲技法の大きな特徴のひとつが十二音技法の利用である。この手法を1957年の「カジミェラ・イワコヴィチの詩に寄せる五つの歌」から用い、メロディという水平的次元と、和音という垂直的次元の両方で活用した。この特徴が最も顕著なのが1958年の「葬送音楽」である。

もうひとつの彼の作品の特徴は「二分割形式」の手法である。まったく異なる2つの形式を作品の中で並存させ、それに解決を与えるという独自の技法を用いた傑作が「交響曲第3番」である。音程の生み出す緊張感、音の高まり、クライマックスで現れる十二音技法、エピローグに不意に現れる長い叙情的旋律など、ルトスワフスキの芸術性がいかんなく発揮された傑作である。

ルトスワフスキは聴衆の知覚、音楽を受け入れる際の心理にも大きな関心を寄せた。調性音楽の伝統からは解放されているが、同時にアリストテレスの「カタルシス」の法則に倣い、類似とコントラスト、緊張と弛緩という音楽の流れにより、聴衆に訴えかけるドラマトゥルギーを生み出そうとした。その良い例が「チェロ協奏曲」である。

彼は音の高さとリズムを厳密に制限することにより、ドビュッシーやラヴェルのような音色の美しさを目指した。フランスの詩人の作品をもとにした声楽曲の多くにその特徴がみられる。

彼が目指したのは、音響や技術の斬新さで聴衆を驚かせることではなく、多くのニュアンスに溢れた豊かな表現で音楽を満たし、聴衆と深い絆を築くことであった。

こうしてヴィトルト・ルトスワフスキは20世紀音楽の古典となりえたのである。

## 曲目解説

### ショパン

#### ◆ 歌曲

ショパンは生涯に歌曲を 20 曲残している。そのすべてが出版を前提とはせず、私的に書かれたもので、それゆえに作曲家のその時々のお気持ちが音に素朴に託されているようである。



**悲しみの川 作品 74-3** (S. ヴイトフィツキ詩) は 1831 年ごろの作品。戦争で七人の娘を失った母親の流す涙が「濁った川」となって流れてくる情景を描いており、異国の地でワルシャワ陥落の知らせを聞いたショパンの深い絶望が表れているとされる。

**いとしい人 作品 74-12** (A. ミツキューヴィ

チ詩) は 1837 年ごろの作品。マズルカのリズムに乗せて、軽快に愛を歌う。この「いとしい人」とは、ショパンが一時婚約していたマリア・ヴォジンスカのこととされている。

#### ◆ バラード第 3 番 変イ長調 作品 47

ショパンのバラード全 4 曲のうちの第 3 曲。1840～41 年に作曲された。序奏付きロンドとでもいうべき形式をもち、全体に優雅で洗練された軽やかな曲想が特徴的である。途中、主題は穏やかさを失い、うごめく低音部に支えられながら疾走し、目まぐるしく転調を繰り返すが、冒頭の旋律が輝かしく再現されると、最後は華やかなパッセージに彩られながら曲が閉じられる。 (高橋健一郎)

### ルトスワフスキ

#### ◆ 「子供のための歌曲」より

ルトスワフスキは戦後 10 年間に 44 曲もの「子供のための歌曲」を集中的に作曲した。本人はそれらを「音楽を聴く子供のための曲」と「歌を歌う子供のための曲」の 2 グループに分けている。単純なメロディー、明快なピアノ伴奏の背後に、独創的なリズム、相次ぐ転調など高度な芸術的手法を巧みに織り込み、子供の音楽性の育成を志向している。



**遅れたウグイス、トララリンスキ氏について**とも 1947 年作。ポーランドの大戦間期の著名な詩人ユリアン・トゥヴィムの詩による。「歌を歌う子供のための曲」に分類される。

**遅れたウグイス**は、歌詞もメロディーも半ば冗談、半ばシリアスな曲想で、疑似ロンド風、五音音階の引用など、ルトスワフスキの個性をいかに発揮している。

**トララリンスキ氏**については、子供のための詩を得意としたトゥヴィムらしい、言葉

遊びに溢れた作風となっている。(佐光伸一)

#### ◆ 「ピアノのための民謡風メロディー」より

##### ああ、私のヤン、羊飼いの少女 ほか

この作品は 12 の小曲で構成される組曲で、それぞれに題名が付され、それがイメージの喚起に一役買っている。全 12 曲のうち最後の 3 曲を除いて、残り 9 曲は三拍子系で書かれている。素朴な旋律に彼らしい和声が施された優れた作品だが、他の管弦楽曲や 2 台ピアノのための作品などとはやや趣を異にする。作曲は 1945 年。(川染雅嗣)

#### ◆ 舞踏前奏曲

1954 年作曲。当初クラリネットとピアノのために作曲されたが、55 年に作曲家自身がピアノパートをハープ、ピアノ、打楽器、ヴァイオリンに書き換えたオーケストラ伴奏版も存在する。ポーランドの民衆音楽をモチーフとした作風から、実験的な作風にいたる過渡的時代の作品。5 楽章からなり、民衆歌謡、民衆音楽のリズムなどの要素がみられる。作曲家自身は「ピアノのための民謡風メロディー」と同ジャンルの作品としている。(佐光伸一)

## 歌曲 歌詞対訳

シヨパン

### Smutna rzeka

Rzeko z cudzoziemców strony,  
Czemu nurt twój tak zmacony?  
Czy się gdzie zapadły brzegi,  
Czy stopniały stare, stare śniegi?

Leżą w górach stare śniegi,  
Kwiatem kwitną moje brzegi,  
Ale tam, przy źródle moim,  
Płacze matka nad mym zdrojem.

Siedem córek piastowała,  
Siedem córek zakopała,  
Siedem córek śród ogrodu,  
Głowami przeciwko wschodu, wschodu.

Teraz się z duchami wita,  
O wygody dziatki pyta  
I mogiły ich polewa,  
I żałośnie pieśni śpiewa.

### Moja pieszcotka

Moja pieszcotka, gdy w wesołej chwili  
Pocznie szczebiotać i kwilić, i gruchać,  
Tak mile grucha, szczebioce i kwili,  
Że nie chcąc słówka żadnego postradać  
Nie śmiem przerywać, nie śmiem, nie śmiem  
odpowiadać  
I tylko chciałbym słuchać!

Lecz mowy żywość gdy oczki zapali  
I pocznie mocniej jagody różować,  
Perłowe ząbki błyszczą śród koralu;  
Ach! wtenczas, wtenczas śmieiej woczęta,  
woczęta poglądam,  
Usta pomykam i słuchać nie żądam,  
Tylko całować, całować, całować!

### 悲しみの川

異国から流れ来る川よ  
どうしてお前の流れは濁っているのか。  
どこかで岸辺が崩れたのかい。  
古い、古い雪が溶けてしまったのかい。

山々には古い雪が残っていますが  
私の岸辺には花が咲き誇っています。  
でも向こうの、私の源では  
泉のそばで母さんが泣いているのです。

七人の娘を育て  
七人の娘を葬り  
庭の中では七人の娘が  
頭を東に向け眠っています。

今では彼女たちの霊と挨拶を交わし  
母はわが子にあの世の暮らし向きを尋ね  
彼女たちのお墓に涙を注ぎ  
悲しい歌を口ずさんでいます。

### いとしい人

いとしい人は、陽気なときには  
おしゃべりし、さえずり、ささやき始める。  
あまりにも甘くささやき、おしゃべりしさえするので  
話はひとことだつて聞き逃したくないから  
さえぎったり、答えたりはしない。  
そして望むのはただ、聞くことのみ。

話しに力が入ると、目が輝き  
頬は苺のようにバラ色になり  
真珠のような歯が珊瑚の口に輝く。  
ああ、そのとき僕は大胆にもその瞳を覗き込み  
口をつぐみ、もう話など聞きたくはない。  
望むのはただ、口づけのみ。

Spóźniony słowik

Płacze pani słowikowa w gniazdku na akacji,  
Bo pan słowik przed dziewiątą miał być na  
kolacji.  
Tak się godzin wyznaczonych pilnie zawsze  
trzyma,  
A tu już po jedenastej – i słowika nie ma!

Wszystko stygnie: zupka z muszek na  
wieczornej rosie,  
Sześć komarów nadziewanych w konwaliowym  
sosie,  
Motyl z różną, przyprawiony gęstym cieniem z  
lasku,  
A na deser – tort z wietrzyka w księżycowym  
blasku.

Może mu się co zdarzyło? Może go napadli?  
Szare piórka oskubali, srebrny głosik skradli?  
To przez zazdrość! To skowronek z bandą  
skowroniątek!  
Piórka – głupstwo, bo odrosną, ale głos –  
majątek!

Nagle zjawia się pan słowik, poświstuje,  
skacze...  
„Gdzieś ty latał? Gdzieś ty fruwał? Przecież ja  
tu płaczę!”

A pan słowik słodko ćwierka: „wybacz, moje  
złoto,  
Ale wieczór taki piękny, że szedłem piechotą!”

遅れたウグイス

アカシアの樹の巣の中でウグイスの奥さまが鳴いています。  
ご主人ウグイスが九時前には夕食に帰って来るはずですから。  
ご主人は決められた時間はいつもきちんと守ります。  
でも今はもう十一時過ぎなのに、ご主人ウグイスの姿が  
見当たりません。

何もかも冷たくなっています。夕暮れのしづくにハエを入  
れたスープも  
ズランのソースに浸した六匹の蚊も  
森の濃い影で味付けした蝶々も  
デザート、月の明かりの中のそよ風のタルトも。

彼に何が起こったのかしら。もしかして襲われたのかし  
ら。  
灰色の羽根をむしり取られ、素晴らしい歌声を盗まれた  
の？  
きっと、嫉妬心のせいね。ヒバリ親子の一味の仕業ね。  
羽根なんてどうでもいいの、また生えてくるから、でも声  
はひと財産よ。

突然、ウグイスのご主人が姿を見せます。口笛を吹きな  
がら跳ねています。  
いったいどこを飛んでいたの？ どこを飛び回っていた  
の？ 私はここで泣いていたというのに。

ウグイスのご主人は甘くさえずります。「愛しい人、許してく  
れ。  
でも夕べがこんなに美しいから、歩いて帰って来たのさ」



## O panu Tralalińskim

W Śpiewowicach, pięknym mieście,  
Na ulicy Wesolińskiej  
Mieszka sobie słynny śpiewak,  
Pan Tralisław Tralaliński.

Jego żona – Tralalona,  
Jego córka – Tralalurka,  
Jego synek – Tralalinek,  
Jego piesek – Tralalesek.  
No a kotek? Jest i kotek,  
Kotek zwie się Tralalotek,  
Oprócz tego jest Papużka,  
Bardzo śmieszna Tralaluzka.

Co dzień rano, po śniadaniu,  
Zbiera się to zacne grono,  
By powtórzyć na cześć mistrza  
Jego piosnkę ulubioną.

Gdy podniesie pan Tralisław,  
Swą pałeczkę – tralaleczkę,  
Wszyscy milkną, a po chwili  
Śpiewa cały chór piosneczkę:

„Trala trala tralalala,  
Tralalala trala trala!”  
Jak to Pana Tralisława  
Jego świetny chór wychwala.

Wyśpiewują, tralalują,  
A sam mistrz batute ujął  
I sam w śpiewie się zapala:  
„Trala trala tralalala!”

I już z kuchni, i z garażu  
Słyszać pieśń o gospodarzu,  
Już śpiewają domownicy  
I przechodnie na ulicy:

Jego szofer – Tralalofer,  
I kucharka – Tralalarka,  
Pokojówka – Tralalowka,  
I gazeciarz – Tralaleciarz,  
I sklepikarz – Tralalikarz,

## トララリンスキ氏について

シピェヴォヴィツィ区の美しい街  
ヴェソリンスカ通りに  
高名な歌手の  
トラリスワフ・トララリンスキ氏が住んでいました。

彼の妻は、トララロナ  
彼の娘は、トララルルカ  
彼の息子は、トララリネク  
彼の飼い犬は、トララレセク  
では飼い猫は？ 猫もいますよ  
トララロテクと申します。  
さらにオウムもおりまして  
とても滑稽なトララルスカと申します。

毎朝、朝食のあと  
名手に敬意を表して  
彼のお気に入りの歌を繰り返すため  
高潔な仲間たちが集まります。

トラリスラフ氏が自分の指揮棒  
トララレチカをふり上げると  
皆が静まり、しばらくして  
コーラス隊全体が歌い始めます——

「トララ、トララ、トララララ  
トラララ、トララ、トララ！」  
彼の素晴らしいコーラス隊は  
トラリスラフ氏をほめそやします。

皆は歌い、トラララと声を上げ  
名手ご本人は指揮棒を手に取り  
自ら歌に夢中ですよ——  
「トララ、トララ、トララララ！」

もうキッチンやガレージから  
家事の歌が聞こえます。  
使用人や、通りの通行人が  
もう歌い始めています——

彼の運転手は、トララロフェル  
そしてコックは、トララルルカ  
ルームメイドは、トララロフカ  
そして新聞売りは、トララレチアシユ  
店の売り子は、トララリカシユ



I policjant – Tralalicjant,  
I adwokat – Tralalokat,  
I pan doktor – Tralaloktor,

Nawet mała myszka,  
Stara Tralaliszka,  
Choć się boi kotka,  
Kotka Tralalotka,  
Siadła sobie w kątku,  
W ciemnym tralalotku,  
I piszczy cichuteńko:  
„Trala – trala – tralalenko...”

警官は、トララリチアント  
弁護士は、トララロカト  
お医者さまは、トララロクトル

さらに小さなネズミの  
トララリシュカ婆さんまでおまして  
でも雌猫は怖くてたまらず  
雌猫のトララロカは  
暗いトラララテクの  
隅に身を潜め  
小さな声で泣いています——  
「トララ、トララ、トララレンコ……」



日本語訳 佐光 伸一

## 出演者プロフィール

### ズビグニェフ・スコヴロン（対談・講演）



1979年にゾフィア・リッサ教授の指導のもとワルシャワ大学音楽学学科を卒業。同大学で文献学も専攻し、ワルシャワ音楽院（現フリデリク・ショパン音楽大学）で音楽理論も学ぶ。86年、博士号取得（ワルシャワ大学）。

84年パレルモ大学に留学、87-88年フィラデルフィアのペンシルベニア大学のレナード・B・メイヤーのもとでアメリカ現代音楽の研究を行う。93-98年パリ高等師範学校（ENS）や、ロンドンのロイヤ

ル・ホロウェイ（RHUL）でポーランドとアメリカの現代音楽に関する講義を行い、94年に教授資格取得、99年よりワルシャワ大学音楽学研究所教授。

専門は現代音楽思想史、二十世紀音楽の理論と美学。主な研究対象はルトスワフスキの作品と音楽思想で、2003年バーゼルでルトスワフスキの音楽論集と創作ノートの出版に向けた調査を行う。

ショパン関連の研究も行い、ショパン書簡集の全面的な新訂版（*Korespondencja Fryderyka Chopina*, T. 1, 1816-1831、ワルシャワ大学出版会、2009。邦訳『ショパン全書簡 1816-1831年：ポーランド時代』岩波書店、2012）の編者の一人でもある。

### 三浦 洋（対談）

北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。現在、北海道情報大学教授。日本ショパン協会北海道支部理事。北海道ポーランド文化協会運営委員。北海道大学非常勤講師（「PMFの響き」「札幌と音楽文化」担当）。ショパンの生涯についての論文多数。北海道新聞などにクラシック音楽時評を執筆。



## 松井亜樹（ソプラノ）



北海道教育大学札幌校芸術文化課程卒業、同大学院修士課程修了。サンクトペテルブルグ音楽院マスタークラス修了。

札幌市民芸術祭主催新人音楽会、第249回札幌市民ロビーコンサート、東京二期会ロシア歌曲研究会の定期演奏会、あらかわバイロイトオペラ『神々の黄昏』、日本演奏連盟のリサイタルシリーズなどに出演。東京国際音楽コンクール、万里の長城杯国際音楽コンクール入

賞。ルーマニア国際音楽コンクール声楽部門最高位、サントリーホールにおける受賞者披露演奏会に出演。札幌市民劇場「松井亜樹ソプラノリサイタル」スラブ音楽の夕べ～ロシア・チェコ・ポーランドの作曲家より～で札幌市民芸術祭奨励賞を受賞。

これまでに三部安紀子、雨貝尚子の各氏に師事。東京二期会ロシア歌曲研究会、北海道二期会、札幌音楽家協議会、北海道ポーランド文化協会、日本アレンスキー協会、ハイメス各会員。札幌大谷大学短期大学部保育科専任講師。

## 高橋健一郎（ピアノ）

1972年札幌市生まれ。東京大学教養学部卒業、同大学院総合文化研究科博士課程修了（学術博士）。1998—2000年ロシア人文大学に留学。ピアノを黒澤節子、故・林靖子、川染雅嗣の各氏に師事。

北海道ショパン学生ピアノコンクール中学の部銅賞、高校の部最高位。PTNA ピアノコンペティション・グランミューズ(A1)全国第2位、併せてロイズ賞受賞。ルーマニア国際音楽コンクールピアノ部

門奨励賞。著書に『アレンスキー：忘れられた天才作曲家』（東洋書店、2011）がある。

現在、札幌大学地域共創学群教授、日本アレンスキー協会副会長、北海道ポーランド文化協会運営委員、全日本ローゼンブラット協会正会員。



## 坂田朋優（ピアノ）

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業、同大学院音楽研究科修士課程修了。ポーランド国立ワルシャワ・ショパン音楽アカデミー研究科修了。

第9回北海道ショパン学生ピアノコンクールで第1回遠藤賞。2003年外山雄三指揮、大阪フィルハーモニー交響楽団と共演。04年ポーランド・M.マギン記念ショパンコンクール第1位。05年日本ショパン協会主催ショパンピアノコンクール第2位。06年



スペイン・カプデペラ国際ピアノコンクール第1位。チェコ・マリエンバート・ショパン国際ピアノコンクールで名誉ディプロマ受賞。ジェラゾヴァ・ヴォラをはじめポーランド各地で演奏。08年帰国記念リサイタル。現在はソロや声楽・合唱等の伴奏などの活動を行っている。

これまでに水口奈緒美、橋本真知、菊池葉子、石田真理、小林仁、K.ギェルジョド、M.ザグルスキの各氏に師事。札幌大谷大学非常勤講師。日本ショパン協会北海道支部、札幌音楽家協議会、日本アレンスキー協会、北海道ポーランド文化協会各会員。

## 川染雅嗣（ピアノ）

1954年北海道北見市生まれ。78年東京芸術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。在学中第24回文化放送音楽賞ピアノ部門で「音楽賞」を受賞。80年ポーランド国立ワルシャワ・ショパン音楽院修了。

帰国後は各地で演奏活動を行う。99年より「あじがさわミュージックフェスティバル」のプロデューサーとして室内楽の普及に力を入れ、その功績により2006年、鱈ヶ沢町文化章を授与される。著書に「明解ピアノ上達法」（ショパン、2003）がある。

研究分野は帝政末期ロシアの音楽で、09年日本アレンスキー協会（本部・札幌）を設立した。

現在、昭和音楽大学音楽学部教授、日本アレンスキー協会会長、北海道ポーランド文化協会会員、（社）全日本ピアノ指導者協会正会員、イカール国際室内楽アカデミー・ディレクター。



## 谷本聡子（ピアノ）

1980年カナダ・モントリオール大学で C.Sava に師事。87年ハンガリー・リスト音楽芸術大学卒業、日本人初のソリストディプロマを取得。P.Solymsos, F.Rados, S.Devichなどに師事。ドイツ・フライブルク音楽大学大学院修了。

ブダペストの春音楽祭、ルガーノ音楽祭などに出演。ダルムシュタット・アンサンブルの一員として日本全国コンサートツアー。92年ボストンでボストン交響楽団のメンバーと共演。欧米各地、ロシアなどで演奏活動。91年、札幌教文コンサートでのリサイタル以来、ベルリン八重奏団、ケラー弦楽四重奏団、新ブダペスト弦楽四重奏団、ザルツブルグゾリ

ステンや、チェロの M.Perenyi など多数の内外ソリスト、ブダペストシティオーケストラ、札幌交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団などと共演。

2001年より PMF ピアニストを務める。13年にわたりラジオのレギュラー番組をもち、クラシック音楽の普及にも努める。

97年、札幌市民芸術祭大賞、札幌市民文化奨励賞受賞。現在、札幌大谷大学芸術学部音楽学科ピアノコース主任教授。



## 菊地秀夫（クラリネット）



桐朋学園大学卒業。クラリネットを二宮和子氏に師事。1993年、日本現代音楽協会主催コンクール「競楽Ⅱ」にて第2位。94年、東京文化会館新進音楽家デビューオーディションに合格。96年ダルムシュタ

ット音楽祭にて奨学生賞受賞。2003年アンサンブル・ノマドの一員としてサントリー音楽財団第2回佐治敬三賞を受賞し、ヨーロッパ・南米・アジアの海外音楽祭に招待参加。スタジオでのレコーディング活動も行い、ドラマや映画の音楽を担当。他ジャンルのアーティストとのコラボレーションも多い。08年より札幌大谷大学芸術学部専任講師。

## Witold Lutosławski

### ヴィトルト・ルトスワフスキ

(1913年1月25日～1994年2月7日)

1913年、ポーランド・ワルシャワ生まれ。音楽への興味は幼い頃から大変強く、ピアノを6才で本格的に習い始め、初めて譜面に曲を書いたのが9才の時だった。子供時代はワルシャワではなく家族が所有する土地で育った。1939年にドイツ軍とソ連軍によるポーランド侵攻が始まり、家族にとっても激動の時代となった。ピアノ演奏に長けていた父親はルトスワフスキ氏が5才の時、ポーランド解放のため軍隊の組織化に参加したことを理由に処刑された。医師の母親は、残された三人の子ども達の生活を支え懸命に働いたが、二人の兄のうちの一人は後に、第二次世界大戦中、ソ連軍によりシベリアに連行され、収容所で亡くなった。

戦後、1950年代半ばからポーランドでは政治上の引



締めが徐々に緩和された。国際情勢の変化を境に氏の作品は海外でも広く知られ始め、1960年代に入ると、国際的な活動も増えた。晩年は主にソリストとオーケストラのための作曲と音響言語の研究に力を注いだ。

東欧民族音楽の知見をもとに偶然性も取り入れた無調音楽の新しい可能性を切り拓いた作曲家。《葬送音楽》や《交響曲二番》などの代表作を通じ、新しい無調性音楽の手法と、独自の「偶然性」の手法を導入するなど、現代的な音楽表現の手法を開発することによって、20世紀音楽の巨匠として、第二次大戦後の音楽界に大きな影響を与えた現代ヨーロッパを代表する作曲家である。

第9回(1993)京都賞 精神科学・表現芸術部門  
受賞者 (京都賞 eMuseum より)

ポーランド楽派を聴く  
～ショパンとルトスワフスキ～

**主催:** 「W.ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演&演奏会」実行委員会

**後援:** 北海道ポーランド文化協会、ポーランド広報文化センター、札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部、札幌市・札幌市教育委員会、日本アレンスキー協会、日本ショパン協会北海道支部、北海道作曲家協会、札幌音楽家協議会